

仕懸文庫

Butsuzō





京傳著

仕懸文庫

大磯廓中  
鎌倉遊子傳記

葛唐丸粹



不許半時  
先刻御邊

1963  
27

自叙 目録

夫頼朝公乃御願會より大ハ  
 獨大儀の賤し形り虎が將我  
 初と一々許多此妓女をせ  
 あゝそ元茶客爰よ通以良  
 梶原ク信海ハ霄宿里れ矢筈

と達へ小林が慢と左右の鬢  
 以手々撫袖成二日蘇乃衛足  
 時致が疳積と煙管の皿を  
 挫ぐ羽織工藤あはな羽織  
 歌妓あり以守人男子等  
 阿豆バ梳篋の妓女衆あり



乃井乃の深深く戒戒且且惡惡所所と  
くし

北條北條時方時方實政實政三郎三郎

祐安祐安辛亥辛亥の荒荒次次らら守守

鬼鬼王王の正正自自和和田田醜醜の

三 日 目

京傳京傳醉醉中中誌誌



仕懸文庫目錄

第一回

大磯往来游戲舟中之談

第二回

朝夷名祐成醉風流忘

還

第三回

舞鶴屋傳三教訓惜妓

第四回

梶原誇口罵蝶

妓為時致謬終身



觀堂

大磯 風俗 仕懸文庫 山東京傳著

第一回

東山小妓と携へ漢土の驕者もいふごと  
糸皂舗の出番のちりりきりおび酒肆  
乃枝菘ぐさおちたのいきりあはれ  
寢小後鳥羽院の御宇文治建久の昔  
鎌倉の巽小あろく一ツの女肆あり大坂  
と名づく寢小あろりてハ陶朱倚頓ガ

其二



四圍



富も桂林ケイリンの一枝いちのでくくろふ居てゐる  
君揚妃キョウヒの美ひも崑山クワン乃片玉ハタタキの如く  
黄金コウゴンの塵塚チンソウ薪氣シンキの捨場ナシバ湯氣ユウキ盛セ  
の場バ不フ小コと願カネ卷マキ安産アンサンの失禮シツレイと不  
くろそそ目メふととととサマおせく乃鄭テイ初ハジメ  
志シのノ雅ガ未ミ承シヤウをウと忠チュウ臣シンも内ウチも山サン孝コウ  
子コもうろ色シキ老ロウらうとれく若ニホ死シらうと  
女メととと八ヤチ多タ清セイとたたく屋ヤととと小コ乃ノ心ココロ  
む

しやうにそひ振ヒりくわまに照テらるるあり  
或アルハ討ウチ或アルハ被ヒるに陸リク孤コのりもの稀マレよ舟フネと  
者モノ多タしゆく舟フネの心ココロも何ナニれ風フウ情セイ之ノ舟フネ  
乃ノ昔キナの公キミの舟フネを楮チ牙ヤ舟フネ乃ノ拍ハク餅ヒヤウの舟フネ  
の内ウチんらう承シヤウるると舟フネ核クワ橋ハシつけば公キミとんぞ  
先サキへより出デらるるうらと港ミナト板イタ取トはき出デせむ  
神カミのふのころ松マツ原ハラらとゆれて君キミのぞく  
客キヤク人ヒト共トモあめされく長ナガをいづく羽ハ織オリとふか











智<sup>ち</sup>彦と申すの事どもね<sup>箱</sup>大らやと申すア  
わ色<sup>アノ</sup>下<sup>ゲ</sup>結<sup>ムス</sup>うまの荷<sup>ネ</sup>おんとりてわらうらら  
そご<sup>+</sup>富<sup>トモ</sup>倉と申すへ<sup>箱</sup>おきくうら<sup>アノ</sup>奈<sup>ナ</sup>く  
わらうららうらわ出<sup>デ</sup>てわらうらら<sup>モ</sup>寢<sup>ネ</sup>の  
さくらの出<sup>デ</sup>おんせが死<sup>シ</sup>川<sup>カハ</sup>よごごりやと移<sup>シ</sup>入<sup>ル</sup>  
きよねん山のうらりぬまうくま申すや  
モシ<sup>モ</sup>くやりやとぬ<sup>ル</sup>箱<sup>コウ</sup>おぢらぬ<sup>アノ</sup>湯<sup>ユ</sup>川<sup>カハ</sup>屋<sup>ヤ</sup>  
のりぬらちひさる<sup>箱</sup>稲<sup>イナ</sup>おアやうんとつふ<sup>文</sup>

山田<sup>ヤマタ</sup>のりきひ中<sup>ナカ</sup>と<sup>箱</sup>祐<sup>ユウ</sup>成<sup>セイ</sup>さん<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>丸<sup>マル</sup>の  
坂<sup>サカ</sup>が<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>記<sup>キ</sup>の<sup>ヒ</sup>り<sup>キ</sup>とつふ<sup>ヨ</sup>大<sup>オ</sup>つ<sup>ツ</sup>そ<sup>ソ</sup>つ<sup>ツ</sup>う<sup>ウ</sup>な<sup>ナ</sup>よく  
志<sup>シ</sup>ん<sup>ン</sup>て<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>や<sup>ヤ</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>オ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>より<sup>リ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>や<sup>ヤ</sup>丁<sup>テイ</sup>門<sup>モン</sup>  
の<sup>箱</sup>女<sup>メ</sup>と<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>り<sup>キ</sup>とつ<sup>ツ</sup>ふ<sup>ヨ</sup>子<sup>コ</sup>お<sup>オ</sup>く<sup>ク</sup>あ<sup>ア</sup>さん<sup>サン</sup>志<sup>シ</sup>ん<sup>ン</sup>て<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>あ<sup>ア</sup>ら  
う<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>傘<sup>カサ</sup>と<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>り<sup>キ</sup>とつ<sup>ツ</sup>ふ<sup>ヨ</sup>茶<sup>チャ</sup>女<sup>メ</sup>と<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>り<sup>キ</sup>とつ<sup>ツ</sup>ふ<sup>ヨ</sup>  
わ<sup>ワ</sup>と<sup>ト</sup>屋<sup>ヤ</sup>ら<sup>ラ</sup>お<sup>オ</sup>ぢ<sup>チ</sup>さん<sup>サン</sup>ぢ<sup>ヂ</sup>け<sup>ケ</sup>い<sup>イ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>う<sup>ウ</sup>  
ぢ<sup>ヂ</sup>ほ<sup>ホ</sup>く<sup>ク</sup>い<sup>イ</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>お<sup>オ</sup>り<sup>リ</sup>ん<sup>ン</sup>ぢ<sup>ヂ</sup>ね<sup>ネ</sup>文<sup>ブン</sup>お<sup>オ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>ケ</sup>つ<sup>ツ</sup>う<sup>ウ</sup>茶<sup>チャ</sup>屋<sup>ヤ</sup>  
女<sup>メ</sup>アイ<sup>アイ</sup>ち<sup>チ</sup>ら<sup>ラ</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>し<sup>シ</sup>ま<sup>マ</sup>ト<sup>ト</sup>つ<sup>ツ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>又<sup>マタ</sup>二<sup>ニ</sup>さ<sup>サ</sup>う<sup>ウ</sup>の<sup>チ</sup>ち<sup>チ</sup>よ  
ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぢ<sup>ヂ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>の<sup>セ</sup>う<sup>ウ</sup>り



















































がハテとていぐヨウアトおのふがわぶりの二年と  
志んがけしてとれぬちうとつとていぬきくくも  
おまを男とさうすせアも年や二年のねんき  
いられくもやさうしてゆめが地少ふちのりそ男  
とゆふちふちてふまきやア又おももせし  
してか人のせりもするやうにしてゆるまゆも志  
つこのとよりおれも長命ぐおれ無はとまき  
玉成わづらつて土地とらんの世活もあておまぐ

内子子伏方一乃とやもあやや、長家申  
へおもが顔がとぬく、きくくうがうてんいんこ外  
ゆくはれぬぬのおん  
ぎのえんちうおれとく  
おてうさんはるがとやう  
はかりの取し

第四回

女ひで まどろい 朝比奈えんモウおりのりな  
はと久 おれ けいごうよきや、おれ ちうと風が  
なごうても内成がんよう おれ ちうと風が

恋で年一とぬ物おらぬのりまこれやうの久

親づけいひごりやせん物十恋たしごぬおりの女

まてしをる祐ありりたぎととてけてまぬおくりうん

ぶけ成幸とこれ乃つるをるをたぬのそおきまてぬ娘

おん下女ると川岸つらつらボヲウシこれよりやんので

まをぬりてゆく入のサアおわぐん

おろし芳紙のみ女ヲヤヌ所さん女サアおわぐん

てらんぬ人女ワウちうぐぬふでくいのせんおの

又そんるうのそ成つけくおのてくごせん表

乃畠山屋ふ友ごらぎそわううそまうち

けあうてまやう女モレマアそれドヤアおてうさん

のりううふごりやと又いかりにいろくおのて

トせんむたふいりてくらアトおんを女どりのをやうちを

又二くふありたうこ今物のみヤ祐ありがくうて箱のさりちにてあるごうたをる

又そんさう今のうら八ぬんどやの湯をのりて

わせ成さうてこまう女そとろとろあけよーあ

せんナそんる事成らうて又おのていしまをるご





であのものをえんちやうと志まらうと志せざら  
 せ終ても秘入（秘）うまアぬ人（ホニ）おつらアのう  
 あらアさうり用事（ようじ）分つげてしうのうこそ  
 どもアぞらぬ人（ちうり）とあう（ま）きん（ま）あうやど  
 ちん公人せんどもう（ま）く（ま）のん（ま）よら  
 うもあう（ま）く（ま）のん（ま）ア（ま）ま（ま）う（ま）ん  
 ぞらぬあう（ま）う（ま）一（ま）目（ま）を（ま）よ（ま）ひ（ま）人（ま）お（ま）入（ま）  
 なくげん（ま）も秘入（秘）の（ま）ト（ま）り（ま）ん（ま）硬（ま）お（ま）き（ま）何（ま）を

む氣がらう（ま）う（ま）う（ま）ど（ま）ツ（ま）ツ（ま）く（ま）う（ま）う（ま）い（ま）ん（ま）ん（ま）  
ト何のうらうらぬまをお（ま）き（ま）ろ（ま）う（ま）ん（ま）ち（ま）う（ま）う（ま）う（ま）を  
せりぬとひひまきひ（ま）の（ま）ん（ま）せ（ま）か（ま）お（ま）入（ま）の（ま）秘（ま）入（ま）と（ま）ん（ま）ど（ま）ら（ま）う（ま）う（ま）を  
 よ（ま）ら（ま）れ（ま）が（ま）ゆ（ま）み（ま）お（ま）つ（ま）と（ま）ん（ま）う（ま）き（ま）ん（ま）何（ま）と（ま）ん（ま）う（ま）が（ま）ぬ（ま）ん（ま）を  
 お（ま）は（ま）よ（ま）ま（ま）ん（ま）が（ま）ま（ま）も（ま）ぬ（ま）ん（ま）お（ま）つ（ま）よ（ま）ま（ま）ん（ま）いた（ま）ら（ま）ぬ（ま）  
 へ（ま）ん（ま）ひ（ま）ひ（ま）く（ま）の（ま）う（ま）も（ま）ぬ（ま）れ（ま）乃（ま）お（ま）入（ま）あ（ま）ま（ま）ん（ま）も（ま）う（ま）く  
 ゆ（ま）よ（ま）ま（ま）ん（ま）わ（ま）ん（ま）あ（ま）入（ま）お（ま）つ（ま）モ（ま）ト（ま）へ（ま）お（ま）ひ（ま）ぞ（ま）ん（ま）の（ま）お（ま）ま（ま）ん（ま）が  
 ま（ま）う（ま）ら（ま）ぬ（ま）人（ま）何（ま）サ（ま）ぬ（ま）と（ま）も（ま）あ（ま）く（ま）わ（ま）ぬ（ま）ら（ま）う（ま）な



こアアをせんらん二を度出とアあの  
 襦あはよりあがう。之田丸あう  
 襦つさおの月おまのりゆさこれん  
 けらみいおあう成うをまうしと竹口とらうけい  
 らむりのまをるを海を物とよまきんで一分二葉ふ  
 もすらなををとらうくこれへらうやアおアあうを  
 のでちんかんとをた  
 神年ちまの喚乃むん狸ねこととれかう小氣きらうこる  
 わしふさをるアかうがわうてんを客きやくくこえ  
 けくまうのら個こシまうく伴ばんでととて  
 通り若瓜喰つとまがたなくくおそれと

ろまのらえう移人あひら近江え名な湖うみあへ同どうざう  
 とらうやうをうにあらあふとらう移うつるまむ  
 すとらやゆん新しんの思しをま何なにらりとつらら乃  
 妻つま出で番ばんのかうととらあつうまをわてら  
 ちうを細こ門かど屋やの芋いも乃の火ひととえう牧まく  
 てつうとあらしと雷かみと管くだ次ぢが口くちのたど  
 こがんとらえをけらうやアガうてん  
 口くちやア出でつととてとらうとまうば















どうすれもんごごせんとせうごごせんと  
 ぐして 天まゝ人のきりも てうおまゝ人あゝ人  
 く 又そんなう 登まゝあのことりぬ てう  
 めげやしやう 又ウコリヤ

仕懸文庫畢



追加

前子許々の山冊やうて此大磯に  
 地へ於めて好まの活情をまゝまゝ  
 録然コニコリキコマカリキの時代か  
 らや十年の物扱を移しくつとんの  
 上にておん流しをきかしてつと  
 以お統の代をいおれたる人情うら  
 を述と風のうらけのうらむる自  
 の



美味と志とをいひて。くまを家  
人ハ一いちがい既い亦また非ひして危あやう不ふ佞ねい  
京傳きやうでん嘗かつ好こうを淫いん蕩たうと著ちやく述じゆつ  
ををとと以もつててどどもも實じつにに前まへにに美味  
ああるるをを述じゆつすす。後のち并なら  
毒どくああるるをを示ししし戒かいをを垂た

の多おほめめ也なり不あ如が美み味みと知しり毒  
我われ志しのの以もつて恐おそれれをを河か狎げんを  
之これ死しす命いのち惜おぼししとと六む豈あ此こ  
境さかをを憚おそるる。君きみ子こ乃すなはちち言ことす  
いいととんん也なり。孔こう夫ふう子し衛ゑい國こくのの老らう實じつ  
家やをを過とりりてて曰いふふ。吾われ未いま

徳このむめと好者。吹ふ肚ぐ臭くと好このむめ者もの。嗟あ夫それ。領このむめ國くに。  
 何なにぞや。  
 鐵てつ炮ぱう汁じゅうの勢いきま以もつて。  
 何なにぞや。  
 何なにぞや。  
 何なにぞや。



現いまと武ぶ彩さい板ばん法ぽう流りゅう派はい追おて出で来来。  
 中なかの由よし求もとむ。少すく後ごをこのまに候こう。

江戸通油町

書林

葛屋重三郎

合  
 十  
 八  
 七

